

1. 背景と目的

1-1. 中村のまち

高知県西南部、四万十川とその支流の後川に挟まれ、周囲を山に囲まれた自然豊かな場所に中村のまちは存在する。碁盤の目状に区画されたまち、京都に似た地形、京都との歴史的なつながり、さらに伝統的な産業と芸能があることから、土佐の小京都と呼ばれている。自然の魅力が広く知られており、訪れる観光客も少なくない。

しかしその町並みにかつての面影はない。大規模な洪水や震災によって過去のまちはその姿を消し、今ではバラバラで閉ざされた建物がただただ立ち並ぶだけとなっている。



図 1.中村の町並み



図 2.現在の立町

1-2. まちと生活

このまちで高校までを過ごし、自分たちのニーズに合った商業施設が少ないことに不便を感じていた。移動手段は自転車に限られているにも関わらず友人と遊ぶときには川を渡った先にある商業施設へ出かけていた。多様な人々が集まるまちで、かつてとは違う形で現在の商業のまちをつくりたいと考えた。

2. 目的

現在の中村のまちは地域の中心市街地でありながら観光客や市民にとって魅力のないまちとなってしまう。

土佐の小京都としての町並みと現在の商業施設の両立により、かつてといまをつなぎ、観光客と市民をつなぐまちの形成を目的とし、計画していく。

3. 敷地

対象敷地は現在の高知県四万十市中村本町 4 丁目と中村桜町である。本町 4 丁目はかつて「立町」と

と呼ばれ、商業の中心地であった。北西には中村高校、東南には中村小学校が存在し、学生の往来も頻繁な場所である。西側には古城山があり、城を模した郷土資料館が山の上に建つ。中村の自然と歴史をもち合わせたこの場所を計画地として選定した。



図 3.対象敷地位置図 図 4.展望台から敷地方向を見る

4. 設計

4-1. 全体構成

4-1-1. 基本方針

かつて商業の中心地であった立町(現中村本町 4 丁目)に小京都を思わせる町並みを形成する。そしてこの通りから西側を歴史と自然を感じる「かつての町」、東側を現在の生活に合わせた「いまの町」として計画する。

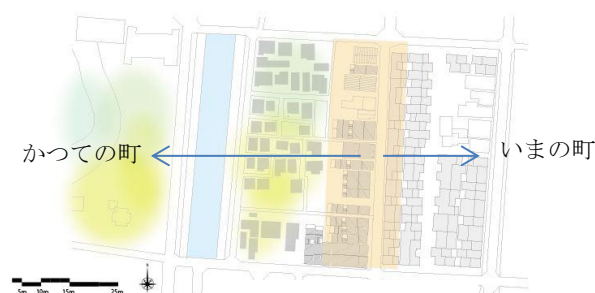


図 5.敷地全体計画

4-1-2. 計画プロセス

- 1.敷地内の老朽化建物、空き家を撤去する。
- 2.空いた土地に町家を建てる。
- 3.町家を移住プロセス中の仮り住いとして利用する。
- 4.商業施設と住宅を配置し、住民を移転させる。



4-2. 歴史と自然の町

通り西側には町家と修景を施した既存店舗兼住宅を移転し配置する。さらに西に進んだ先は文献による

と湿地であったため、自然空間が広がっていたと考えられる。このことから住宅を移し、自然空間へと転化する。かつて存在した幅約30mの堀の再生を加え、通りから古城山までの範囲を歴史と自然を感じる場として計画する。

住民の移転後、既存建築の基礎の形を残し、町の記憶として保存する。

4-2-1. 町家

町家については現存しているものが無いので『小京都中村』という文献から想定される空間構成を採用する。中村の町家は前土間と3室の続き間、裏庭から構成され、間口は3間を基本とする。

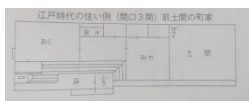


図 6. 参考図



図 7. 構成の決定

町家は宿泊施設や休憩所、展示など多目的に利用できる場として開放し、通りから奥の自然空間へ人々を導く。

4-3. 人と地域をつなぐ町

通り東側には商業施設と敷地内住民の住宅を計画する。町並み形成にあたり、敷地内住民は移住を余儀なくされる。そこで基礎を立ち上げて内部を商業施設とし、その上に住宅を配置し新たな町を形成することとした。

通りに面する部分は木造とし、徐々に基礎を立ち上げることで商業施設内に人を導く。基礎の立ち上げに伴い上の町も緩やかに立ち上がり、住宅部における眺望を確保し、ランドマークとしてのかたちを形成している。



図 8. 町の立ち上げダイアグラム

東側に位置する国道439号線は流れが速く、比較的高さのある建物が並んでいる。その一部にかつて紺屋町だった名残から染め物の店が存在していた。建て替えられてはいるが伝統を継承する場として残すこととした。

4-3-1. 商業施設

商業施設は町家に対応して間口3間相当の5.4mをモジュールとして前面位置を合わせて配置する。裏の空間は東西にずれさせることで動きのある空間をつくる。かつての裏は現在の表に変わり、ゆったりとした賑わいを見せる。

西側は店舗を並べ、東西方向への動線を強調する。一方東側は壁により学生、観光客、住民のスペースを区画し、それぞれを緩やかにつなげることで人々の交流の場とする。レンタサイクルのターミナルも設置する。

4-3-2. 住宅

住宅は5.4m×2.7mを基本ユニットとし、このユニットを東西方向へ連ねて単身者用、家族用の住宅とする。ユニット数の違いからずれが生じ、日射や庭スペースを確保することができる。

住宅内には自由なスペースとして使える土間があり、中廊下との間は格子戸で区切ることで内部と外部の交流をしやすくする。

階下の商業施設の天井高変化に合わせて、住宅部の床スラブにも変化が生じる。中廊下の高さ変化によって出来たスペースは人々のたまり場となり、プライベートな庭となる。またスラブの一部を抜くことで階下とつながり、商業施設を訪れた人々は上のまちの存在を感じる。

5. まとめ

かつての商業の中心地である立町に、かつての町といまの町が生まれた。かつて裏だった場所は現在の表として新たな商業の中心地となり、かつてと今をつないでいく。小京都の町と商業の町を両立したこの場所は、観光地として、また地域の生活を支える場として人々の豊かな交流を生んでいこう。

6. 参考文献

- ・中村町史 市町村制施行100年記念復刻版
藤倉忠義翁の碑を建てる会
- ・改訂 小京都中村 岡村憲治 著
- ・土佐の「小京都」中村
—その歴史・町並み復元と史跡—